当院の乳房超音波検査における良悪性診断精度の検討

◎髙橋 有加[1)]、浅井 奎子[1)]、馬場 昭好[1)]、大西 一嘉[1)]
医療法人社団 石鎚会 京都田辺中央病院[1)]

【はじめに】当院は京都府南部地域の中核病院として乳腺外科を標榜し，検診から診断・精査・治療を一貫して行っている．乳腺腫瘍の検出とその良悪性診断は乳癌の早期発見・治療に直結するため，超音波検査の優れた診断能が求められる．そこで，自施設で針生検が施行された症例について超音波検査結果と病理結果を比較し，良悪性診断精度を検討した．

【対象および方法】2023 年 4 月から 2024 年 9 月に当院で針生検が施行された 139 症例．対象は全て女性，平均年齢は 62 歳（中央値 60 歳）．日本乳腺甲状腺超音波検査医学会（JABTS）の診断超音波検査カテゴリーに従ってカテゴリー4 以上を悪性, 3b 以下を良性と診断し, 正診率, 感度, 特異度を求めた．

【結果】病理結果は，悪性 106 例，良性 33 例．超音波検査の良悪性診断精度は，正診率 83.5 %，感度 86.8 %，特異度 72.7 %．組織型別の感度は，非浸潤癌 71.4 %，浸潤癌 91.5 %.

良悪性診断精度は，感度に比べて特異度が低く，組織型別では非浸潤癌に対する感度が浸潤癌に比べて低かった．

【考察】特異度が低い要因として，乳腺組織の実質変性を不整形腫瘤と捉えたこと，ドプラ法評価で豊富な血流や RI 高値など悪性が考慮される所見を認めた症例では B モード法評価に関わらず悪性と判断したことが挙げられた．非浸潤癌の大部分を占める非浸潤性乳管癌（DCIS）は多様な画像所見を呈するため鑑別に苦慮することが多い．本検討でも DCIS 全 21 例中偽陰性であった 6 症例は，いわゆる典型画像ではなかったため良性と判断していた．診断精度を上げるために，低頻度・非典型症例に遭遇した際は全技師間で情報共有することで互いの知識を補い，適切な良悪性判定に繋げることが重要である．

【結語】自施設における診断精度を客観的に評価することで多くの課題や改善策が得られた．今後も評価を定期的に行い，技師間へフィードバックすることで良悪性診断精度の更なる向上を目指す．

“京都田辺中央病院　臨床検査科―0774-63-1111”